

### 3.11 ユースサミットの公開報告書（記録）

■開催日時：2022年12月17日（土）13時～16時

■開催場所：オンライン（仙台駅前貸会議室大（Aホール）より配信）

■参加者数：36名（うち、参加者19、登壇者10名、JCN7名）

■開催趣旨

当団体では2019年より東日本大震災を小中高の時に経験した方に登壇いただき当時の体験談等をお話いただく3.11 ユースダイアログを大学の授業や一般参加者に向けて開催してきました。3.11 ユースダイアログの中で語られた声の中には、多くの学びや気づき、また、大人や支援者が考えるべきことがありました。こうした気づきや考えるべきことをテーマとして、若者と大人が議論する場を設けたいと考え、3.11 ユースサミットを開催することとしました。議論をすることで、他者理解の促進や震災教訓となることを狙いとしています。

■プログラム

- ・1部：あの時の自分には何が必要だったのか？
- ・2部：みなさんにとっての復興とは何か？
- ・3部：災害時の子どもに対する関わり

■登壇者紹介

江刺逸生さん（岩手県大船渡市）

高橋未宇さん（岩手県陸前高田市）

香月昂飛さん（宮城県石巻市）

阿部愛さん（宮城県石巻市）

志賀風夏さん（福島県川内村）

佐藤勇樹さん（福島県富岡町）

清水葉月さん（福島県浪江町出身）

武藤礼司さん（福島県富岡町）

田中彩貴さん（新潟県長岡市・中越地震）

中村翼さん（兵庫県神戸市・阪神淡路大震災）

■第1部

【前半】

<テーマ>あの時の自分には何が必要だったのか？

<登壇者>香月さん、志賀さん、高橋さん、武藤さん、田中さん

<聞き手>富田

- 田中) 当時小 6、11 歳のとき。中越地震で私が住んでる地域は 6 弱、家の中はぐちゃぐちゃ。必要だったのは、余震がきていたが、大丈夫だろうと安心感があって危機感が足りていなかった。家の中にいたが、逃げろとトイレの中に家族でいた。狭いところに逃げたらいいんだという自分の判断も、今思うと合っていたか間違っていたのか、トイレのドアが歪んで出られないなどあると正解ではなかったなど。地震に対する知識が足りていなかった。自分よりも、家族の方が悲しんで苦しんでを見てきて、自分が悲しいという前に、まわりが苦しんでいるから、苦しい悲しいと言える環境じゃなかった。自分の思いを話せる場所、我慢しなければならなかった、自分の気持ちはどこへぶついたらいいかという思いがあった。
- 武藤) 僕のある時は、小学校から高校までの避難先での長い間。富岡町で地震を経験して、原発事故の影響が強く、強制避難した。親の地元の九州に住んでいた。友達と比べると肩身が狭い思い。被災地からの距離が離れていたのも理解が乏しく、しんどいなかで、自分の気持ちを言い出しにくい。皆みたいに遊びたくても、こういうバックグラウンドで九州に来たので、思った学校生活を送れなかったりで苦しかった。必要だったのは、被災しても、普段の学校生活を楽しめるような日々を送れる何か欲しかった。
- 高橋) 震災から 1 週間後に盛岡市に二次避難し、福祉施設にいた機関が 3 ヶ月。私のあの時は、地震発生から福祉施設の避難所を出るまで。生まれつき車イス使用者で、当日避難した直後はみなさんが避難所で地べたで生活するなかを移動したり、車いすです使えるトイレが使えなかったところ、両親が暮らしやすいように福祉避難所を見つけてくれた。大人たちも不安を持っている中で、いろんな情報が入ってくる。自分の中で情報をキャッチして、同じような情報を求めている大人の人がかこれってどうだっけ?と言った時に、自分がキャッチした情報を言うと、子ども癖に余計なことを言うんじゃないとよく言われた。当時自分なりにキャッチした情報、それは公衆電話のことだったが、もう少しそれを聞いてほしかった。
- 志賀) あの時、何段階かに分かれている。震災直後からすごく大変な思いをされてる方もいらっしやっただと思うが、私の場合は相馬市で被災し、家屋が無事で、学校もやっていない。避難所にいっているわけでもなく、自宅待機して、何が起きているかわからないでいる時間がすごく長かった。両親が川内村にいたので、合流するまで 10 日くらいあり、その 10 日間は何もできない感じだった。大人は仕事や普及作業をしている方いたが、私たち普段学校に行っている世代の人達は、何をしたらいいんだろうと空白の時間があった。その時に助かったのが、避難所におにぎりを握って届けるボランティア。入手できない地元の人たちの情報を手に入れたり、話し相手に不安を共有できるというのもあった。子どもだからというのではなく、いま何が起きているのか、私たちの世代には何をしてほしいのか、私たちもできることはあったはずなので、それがあれば良かった。被災した後の情報は、被災地にいない方がテレビで仕入れて

いる情報とかわらない。避難所にいけばもっと密接した地域の情報を手に入れられたかもしれないが、個々に避難するとどうやって情報を手に入れていいかわからない状況。SNS やニュース番組を見て入手していたので、どこから情報を手にいれたらいいかわかったらもっと違っていたと思う。

香月) 高校2年の時に震災にあって、避難中に津波で父と死別、震災孤児になった。大きく3つに分けて、まず生命に関わる衣食住。次のフェーズになると、父と死別している関係から、その時のことと向き合わなければならないが、心の整理がなかなかつくものではない中で、人との対話したり、コミュニケーション取ること、死別したところにフォーカスして考える時間が少なくて済んだ。心を整理する時間を直前に設けるのではなく、もう少し落ち着いて考えられるまで、そこに触れなくなかった。たまたまだが、避難所やお世話になった家で小さい子どものお世話をしたり、なにげない日常の会話とか、ゲームをしたり、コミュニケーションを図ることで、心が落ち着いたり、平静を保っていた。その時は心を整理するコミュニケーションが必要だった。長期的には、兄と2人で取り残されてどうするかという問題に直面していたので、お金の問題、学業、生活、心、住まいの問題など、自分と兄で決断していかなければならない。それを一つひとつ切り離して支援いただくことはあったが、包括的に支援してくれる方がいたらすごく助かったと思う。例えば、介護や精神医療の現場だと、ケースワーカーや地域相談員がいて、病院や介護施設との連絡、訓練する所は訓練する所の調整や資格はどうするとか、その人のために地域一丸となって包括的にサポートする体制が整えられている。それと同じように、被災した子どもを被害の大小にかかわらず、包括的に支援する所があったらよかった。

高橋) 包括体にといいのに共感。盛岡の福祉施設は子どもにとって暮らしやすかったと思う。3つ要因は、子どもが走り回れる場所があること。広い施設でスペースがあった。子ども同士で遊べるものがあること。それを見守ってくれる大人がいること。大学生のボランティアを始め、遊び相手や物資の仕分けなど色々な方がいた。遊んでもらったり、勉強をみてもらったり、子どもが暮らしやすかった。それができたのは、いろんなところと連携して、包括的に生活を支援できるように、環境などを考えた運営をされていたと思う。

田中) 誰かに聞いてもらうだけで心が穏やかに楽になれる。ボランティアの方の支えも昨日のことに覚えている。心を刺激されるのは大事だと思った。

志賀) 心情を話せる人、コミュニケーションが大事という。話せる相手って、被災したレベルが同じ人だったら話せたとかはあるか？ 支援で話を聞きに来たこともあったが、全部かわいそうでしたねという目線で語られて、他のこと聞いてくれないの？ とか。辛かったね、私こういうボランティアしたんだよ、募金したんだよと言われても、で？ という。私は同じ被災のレベルの人としか話せなかった。被災のレベルが違い

で、同級生や仲良しのグループでも話せなかった。どういう人だと話せたかありますか？

武藤) 僕はまわりになかったが、先生やカウンセラーに話すことができた。その裏には、学校の先生が集まって全員でどういう対応をするか、どう気を使っていくかを話していた。自分で話していて、どうしようもないなという時はあったが、いざ話すとき受け止め方が丁寧で、言葉で片づけない、相談した後も継続的に声をかけてもらった。場合によっては、生徒も巻き込んで考える時間を設けてくれた。そういう人には信頼して話せた。

香月) 話をよく聞いてくれたのは学校の先生。沢山話を聞いて、学業や将来についてはアドバイスしてくれたが、生活の問題、住まいの問題になってくると、学校で介入できる限界があって、先生自身も苦しんでいたと思う。学校と連携して、学業も生活も住まいのことも、例えば、被災地に入るボランティアや NPO がそういう役割を担って、学校とも連携するし、必要な手続きなら行政書士を紹介して、役所に届出するような人がいてもいい。やはり、いきなり来られてあなたのカウンセリングしますと言われるのも、その人に心の奥の悩みや不安を打ち明けていくのは難しい。

田中) 私の時は、小6になるとみんな意地を張って、俺怖くねーしとか言う子がいたり、自分の怖さを友達にぜんぜん話したことがなかった。家族に話しても、家族も悲しんでいるから、言ったらいけないかなみたいな感じだった。みんな怖いのに意地をはっていたなと覚えている。分かち合えるところがあつたらいいなと思う。

香月) 例えばどのくらいの距離感の人だったり、年代の人だったら話せたか？

田中) 地震をあげわってない人に話しやすかったと思う。とにかく話を聞いてもらいたい。怖かったんだよ、助けてみたいな感じの、包み込んでくれる安心感がほしかったと思う。

高橋) 私はボランティアに来ていた大学生に話すことが多かった。最初から震災のことを話したわけではなく、震災がなかったらあの日なにする予定だったんだよ、地震がなかったら今頃これをやってる予定だったとか、震災前はこんなことが好きでとか、そういう話から入っていった。この人なら大丈夫という信頼関係がしてくれるのが重要だった。

田中) 会話の内容を考えてしまう。かわいそうと言われると、あ、私かわいそうな人間なんだと思って、余計悲しくなってしまうから、言う側もちゃんと考える必要がある。

志賀) まわりとしゃべっていても、自分より辛い人、悲しい人がいると思うと、これが辛い、あれが辛いとは言いづらい。

武藤) 震災と関係なしに、身内の不幸や普段生きている中でも大変なことはある。そういう人を見ると、自分だけがそういう目で見られるのは違うのかなと思った。

志賀) 我慢やため込んじゃてる部分がある？

武藤) 我慢ではないが、自分が気持ちが落ち込んでたり、そういう風にみられる中で、そう

いう人を見ると、自分はこのままじゃいけないなと思って、被害者面ではないが、そういうところから脱さないといけないなと思った。

志賀) 学校の中で被災した人は他にいた？

武藤) 誰もいなかった。

志賀) 先生方がケアをしましようとなったのは、武藤さんが来たことで、どう対応するか考えましようとなったということ？

武藤) そうですね。兄も小学校が一緒だったので、母が会議室に行って、他の先生方が集まってるという感じでした。

富田) 我慢しなきゃと思っていた中で、はじめて自分の気持ちを言えた人やきっかけはなんでしたか？

田中) しばらくは言えなかった。落ち着くまでは自分の中でため込んでたわけではないが、言えた時は卒業文集で、みんな6年間の思い出って書いてる中、中越地震というタイトルで自分の思いをつらつらと書いたのが初めてかもしれない。これは大人になって見返そうと思って文章で発散した。

志賀) 私もまわりの人に言えなかったので、匿名で Yahoo!知恵袋に書いたのを今思い出した。何でみんな普通の生活になっているんですか？とか、言えなかったことを全部言って。厳しい意見やコメントもらって落ち込んだり、励ましてくれる人もいて、頑張ろうと思ったりした。匿名の場所みたいな、吐き出せる場所も必要だったかもしれない。

高橋) 口だけでなく、知らず知らずため込んでいた部分もあるかもしれない。そういうのが文集や知恵袋とか、ツールとか手段があったことで吐き出して浄化できたこともあるのかなと思った。

<オブザーバーから>

佐藤) どのタイミングで誰に話すかは私もあった。話す内容や場合によって話したい相手が変わることがあった。どのタイミングであっても、そこはすごくわかる。

江刺) ひとそれぞれ話せるタイミング違うが、ワンクッション必要かなというのは共通している。震災が起こった直後は動揺や混乱のさなかなので、心を整理する段階ではなく、徐々に日常会話ができたり、一緒に遊んだり、そういう時間があるとちょろちょろと話していけるかなと思う。

<参加者から>

みなさんの率直なお話、いろんな言葉が重なって心に響いてきた。あの時というのが長いスパンで話されたことがびっくりしたのと、いろんな思いを話すことが、対人ではなく、文字にしたというのも印象に残った。包括的なサポートというのも災害後の対応でとても大事になると感じた。

【後半】

<テーマ>あの時の自分には何が必要だったのか？

<登壇者>佐藤さん、清水さん、阿部さん、江刺さん、中村さん

<聞き手>杉村

佐藤) あの時あんなことがあったから良かったという視点で話をしようと思う。富岡町で原発避難を経験し高校で福島へ戻ってきた。高校の探究事業で地域に関わった際に、風潮として震災に関わろうとする若者が素晴らしいという空気感があり、やっている理由は復興の課題解決のためではなくてもそのレッテルを貼られてしまう。将来も戻ってきて復興のためになにかしてくれるんだよねと思われる。その当時関りのあった大人の方に戻ることがすべてじゃない、好きな場所で好きなことをしなさいと話してくれたのが頑張るすぎる必要がないと思えた。

清水) 浪江町で被災し原発事故で千葉県へ避難。事故当時自宅におり、ちゃんと避難ができなかった。浪江町は原発から 10 km の場所に位置しているにも関わらず避難訓練も無く知識も無かった。原発が爆発した際の大きな爆発音も聞きとても怖かった記憶がある。避難した後に、周りとの温度差、距離間がどうしても違う。何が起きたのか分からずニュースを見るたびに自分がなぜここにいるんだろう、なにもできないと思ってしまった。経験が話せるようになったのは転校先での高校の先生に回りのクラスメイトは気を使って聞いてこなかったという部分を橋渡ししてくれた。

阿部) 震災当時まだ幼稚園児だったため自分を見てくれる人が欲しかった。見てくれる人がゼロではなかったが大人も自分のことで精一杯で子供に目を向けるが難しかったと思う。子どもへの支援が必要だと思う。とても仲良かった親友を亡くし、なぜその子は亡くなって自分は生きているんだろう？自分が死ねば良かったのにと重く考えてしまった時期があった。中学生や高校生だけではなく、幼稚園ですでにその感情が自分にはあったので今後の災害時には子どもへの支援をもっとしてほしいなと思った。学校生活は送れていたが、サイレンの音や、野球場の音、緊急地震速報も過呼吸になってしまうくらい恐怖心でしかなかった。同じ被災をしていますが友達の中にはなんでそんなことで？と言ってくる子もいたので子どもに対しての理解を得られるような場があると良いなと思う。

江刺) 当時あってよかったものそこからずっと探しているものがあり、それは役割だと思う。中学生の時に震災が起こり、子供でも大人でもない微妙な年ごろで大人たちが被災した町へ繰り出していく中自分は家でどうしたらいいのだろうかと家で待っていた。空白の時間はあった記憶がある。母から、まだ余震もあったので祖母の近くにいて何かあったら守ってほしいと言われ、ただ家にいるという罪悪感も 1 つの役割をあたえられたことで救われた。高校に進学してからは心理士を目指し、大学へ入学後は

語り部もするようになった。生活は落ち着いたようにみえたが何で亡くなった人がいるのに自分は生き残ったのかなと思うことがあった。幼馴染を亡くし、なぜその子は亡くなり私は生き残ってしまったという気持ちがあった。生き残ってしまった自分がなにかやらなければいけないのではないかと、罪悪感をどうしたらいいかと考えることがあった。幼馴染だった子は当時学校に来ていない状況で来ていれば学校は被災しなかったのだから亡くならなかったのではないかと、そもそも学校に来れるような状況にしておけば良かったのではないかと、というところから心理の道に進むきっかけにもなった。生きて自分の役割があると救われると思う。

中村) 兵庫県神戸市、僕自身は当時母親のお腹の中にいたので震災時の記憶というものはないが、その中で大きかったのはメディアとの付き合い方。今でもいろんなところから取材が来るが当時こうして欲しかったという気持ちがある。震災直後両親は、家の近くの避難所である小学校へ避難し、見ず知らずの方が通院していた病院までのせてくれた。いつ生まれるかわからない状況でライフラインがストップし20分かかる病院も3時間ほどかかって到着した。その中でも警察が誘導してくれたり偶然と人との繋がりから午後6時21分に生まれた。両親がにその日生まれたことの記念として新聞に応募したことから取材の繋がりができた。「奇跡の子」として毎年誕生日には取材があった。小学校入学シーンなど、子どもながらに何を撮影しているのだろう。中学3年生のタイミングで心の整理ができないまま取材を受けた。メディアに対しては嫌悪感があり、当日に生まれたのは自分の中でも意味があるのでないかと思っていたが、何をしたらいいかはわからない葛藤があった。子どもでも気持ちを尊重して取材をしてほしいと思った。

(ディスカッション)

清水) 自分で決めたことじゃないのにメディアや大人が聞きたいこと、こういう人材になる、復興を背負う子になるというふうにメディアが持っているこうとする空気感を感じる。

佐藤さん) 何回も取材を受けているとこの人はどんな事を言ってほしいか分かってきてしまう。当時取材に対してうんざりし、断固として言わなかったら取材する人に嫌な顔をされた。

中村) 言わされているという感じはあり、大人がこれを求めていると嫌でも分かるようになってくる。自分の記憶からなくなってしまうのも悲しいので語り部として語ろうと思うし、メディアのおかげで記憶を思い出すこともあり、感謝する部分もある。

江刺) 被災者というレッテルを貼られるのがいやだと地元にいるときは自分も嫌だなと思った。大学に上京し、自分だけ被災者の状況で出身地を言うと大変でしたねという人と、全く何も触れない人では「私被災者なのに…大船渡知らないの?」と心で思ってしまった。被災者として扱われないことも傷つく感情があった。知らなくて触れないのと知っていたけど触れないのでは労りの言葉がワンクッションあると被災者

なんですと自分から言えるのになと思う。被災者という枠組みが葛藤するときもあれば欲しいときもあるなと思う。

清水) 触れられすぎて過度に美化されるのは嫌だけど、触れられないと興味ないのかなと複雑な気持ちになる。

江刺) 阿部さんの話の際に回りの同級生の反応について話してくれたが、震災についてどう感じていて、どんな気持ちなのか人それぞれ違う。10年経ってもまだ震災のことが自分の中には残っているのに、他の子でけろっとしている子がいるとそこでももやもやした気持ちになる

阿部) 本当に何とかしなきゃと思いつながりながら生きていた。変に美化され、一部だけを取り上げられて、メディアと自分が伝えたかったことが違うことはあるという話を聞いたことがある。欲しい答えがあって書きたいように聞いたら記者さんが自分で書けばいいのになと思った。

<オブザーブから>

高橋) メディアの美化について、この報道を見た人が次につながるような記事にしてほしいが、きれいな話題性のある記事を書くのは違うなと思う。

香月) 震災孤児として、メディアからすると恰好のネタだった。思春期ならではの葛藤や恥ずかしさもあったが、大人になりメディアを通して1つでも助かる命があるならと役に立ちたいと思って語っている。自分の伝えたいことが100伝わらないとしても私はその中に想いや助かる命に繋がってほしいと思っている。

武藤) 九州から福島の大学に進学する際に新聞の取材があった。高校生活は不登校の時期もあり、受験勉強もしんどかった悩みもあったこと、それを回りに言えず過ごした時期もあったことを話したが、実際の記事では大学進学し地域のために頑張るという美化された記事になった。今考えると当時者の想いを置き去りにされた取材だなと思った。

志賀) 地元が好きで実家に帰ってきたのに、震災復興のために帰ってきた若者という美化のされ方をしてしまう。地元を離れた友達にも意識高いねと言われたのに腹が立った。自分が伝えたことを伝える発信者と受信者のギャップもあると感じ、まったく震災の話を知らない人がいるとモヤとした。大学中退した理由も同じ福島県出身でも被災した人と家を追われていない人のギャップについていけなかった。どうせ原発はなくなると軽い気持ち言われた。他人事として考えられていた。

田中) 子どもだからこそ、大人が思っている以上に感情もあるし、考えや意見も持っているというのを大人は知っておいた方がいいと思う。阿部さんの話でも幼稚園の記憶を鮮明に覚えていることについて、小さいときの記憶の方が大人になっても覚えているので大人になった今こそ子供に対して考えることがあるなと思った。

<参加者からの感想や質問>

貴重なお話を下さりありがとうございました。当時、子供だったみなさんが精神面においてこんなにも置いてけぼりにされていたと知り驚かされました。大人だけではない子供を置いてけぼりにしないこと、教育の機会均等やストレスの発散方法について考えさせられました。

お話ありがとうございます。私も被災者であり支援者という立場にも立ったことがありますが、子供というものは弱い立場にあり、思いを伝える手段がどうしても拙くなってしまいます。かく言う私も長子であることや私より精神面が辛い友人がいたため気丈にいる事続け、今パニック障害という形で表面化しています。個人的には割り切っているつもりではあったのですが、それも心からの本心ではなく、そう思いたくているのだろうかと自問自答しております。

当事者である若者との接点がないので、思いを知りたくて参加させていただきました。大人の1人として、とても反省しています。大人がきちんとしてこなかったツケを若い人が払い続けなくてはいけない社会になっていますよね。どうしたら変えられるのか、一緒に考えさせていただきたいと思います。

震災被害の差から生まれる格差や差別による話しづらさやシコリは難しい問題だと思っていて、中にはそれが引き金となって（震災前の）町内会が解散までに発展した話も聞いたことがあります。登壇者の皆さんも過去に誰かの言葉や態度に対して嫌な思いをされたこともあるのではと思いますが、その時の相手に対する感情はずっとシコリとして残り続けるのか、または気持ちが和らいだり、自分の中で整理がつくことはあるのでしょうか？

<回答>

阿部) 友人に心ないことを言われたことは今も残り続けている。この子と同じような話題になったときまた同じことを言われてしまうと思うので自分の感情を表に出さないようにしていた。自分の中で整理できるかわからないか否定する子、しない子の認識をしてしまう。

清水) 福島のことをみんなで聞こうと話した時に、その話を聞けるのはあなたが強いからだよって言われてもやもやした。今思うと強かったわけではなく場として話せる場が欲しかった。でも子供支援していて思うのは無理に聞くのは違うが、話したいときに話せる環境、その子の話したい内容を引き出すことは大人として大事なことだと思う。

## ■第2部

<テーマ>みなさんにとっての復興とは何か

- 高橋) いろんな復興がある。町が再生する、心の復興、それぞれその通りと思う。一方で復興ってどうなった状態か考えると、災害が起きて、いろいろな経験をして、学んで、次なる災害で以前の災害の教訓が生かされた時が復興なのかなと考えるようになった。あの時の教訓があったらからだよねとなった時、災害にあって可能な限り被害が少なくなった時、自分たちが自然との関係を築いて、そこに生き延びたというところが、ひとつの復興と思っている。
- 清水) そもそも復興って何かというとき、元に戻すという意味合いが強いと聞いたことがある。でも、元に戻すのは難しい。津波の被害や災害で、地形自体が変わることもある。元に戻すのではなく、そこにいるメンバーの中で、自分たちが納得感のある選択をして、自分たちの町になるというのが復興かなと思う。ハード的なことだけでなく、自分の居場所とか、みんなで納得した場をつくる、そんな復興かなと思った。
- 田中) 復興は元に戻そうという意見が多いと感じる。中越は18年経った今も町が復興できたとは言えなくて、お店もなくなってきているし、お祭りも活気がなくなった。それは今後5年10年経っても厳しいかなと思う。そういう形での復興は厳しいが、心の復興、災害が起きたことは戻れないので、震災が起きたからこそできた絆はあって、地域のつながりやこういう出会い、縁、つながりを大事にしたい。心のつながりが復興だと思った。
- 佐藤) 一言でいうと、人々が折り合いをつけることが復興になると考えている。一人ひとり求めることは違って、地図上の元いた町に住めればいいという人もいるし、昔の風景のままの町に住みたいという人、自分の整理がつけば復興という人もいる。その個人が折り合いをつけ終わった段階で全体の復興になる。一部の人の復興で住みやすい町になると、元の町に戻したい人の復興からは遠ざかってしまう矛盾、相反する。復興に近づけば、復興に遠ざかる人がいるみたいなのが復興なのかなと思う。その上で私の復興は、震災の経験やかわりすぎてとても故郷と思えない自分の住んでいた町との距離感だったり、どうかかわっていくか整理がついた段階で私個人の復興は終わるのかなと思っている。
- 阿部) 復興ってなんなんだろうと調べたら、一度衰えた壊れたものがふたたび盛んになったり、整った状態になることと書いてある。ネットに定義されている復興は不可能と考えている。私の中の復興は、悲しくならない、気持ちに折り合いがつくみたいな感じだと思う。私はまだ復興していないとされていて、私の家の周りには、家の土台の基礎のままの土地が一杯ある。あれを見ると悲しい気持ちやビクッとくるものがあるので、復興はしていないと考えている。
- 中村) 復興と調べた時に、再び勢いを取り戻すことと出てきた。復興自体に終わりはないと思っている。風化させずに若者が語り継いでいく、受け継いでいくのが大事だと思う。被災者としての復興、被災地の復興もいろいろ。被災者としての復興は、精神的に辛い部分をもう一度災害前の状態に戻すとか、被災地の復興だと活気があった時の町

に戻すということになると思うが、いま現実に終わりが無い。まだ乗り越えられない人や、完全に復興したと言わない人もいると思う。なんとかにする、という断定的なものではなく、今後していくという風に、半永久的に続いていくものかなと思っている。

江刺) 私が思う復興は、いまの日常をいつも通りの日々と思えることかと思う。震災で今まで通りというのが、根こそぎ奪われて、非日常の中を生きてきたと思う。非日常は不安定で、心細くて、悲しくなるような毎日と思う。そこが落ち着いてきて、少しずつ今を生き出した時が復興なのかと思う。人それぞれ、震災から一か月くらい経ってから、少しずつ日々の家事をしたり、仕事をし始めたというのであれば、それも復興と思うし、故郷に戻った時に、ここがあつた町だと思えないというのであれば、まだ自分の中で復興していないというところでもある。度合いは人それぞれと思うが、いろいろなところ含めての故郷や、いつもの自分だと思えるのが復興と思った。

志賀) 復興という、こういう会話をしなくなるのが一番復興したなと思っている。私たちの地域はいまだに放射線量の測定があつたり、今後原発処理水の海洋放出があると、復興から遠ざかってしまうと思う。そういうことを考えずに日常の生活ができるようになるのが復興なんじゃないかと思う。ただ、復興と言われるものが、完了したからいいかというのと、例えば、国が推奨しているAI化やドローンとか、便利なものを被災地域に入れたりするのが政策のひとつだが、それが復興かといわれると、私は地元の残っているもの、地震でなくなってしまったものを引き続き残すかということも復興と思う。復興というワードが出なくなることは思うが、それが完成形ではない。

香月) 対比で考えてみて、復旧は急に復するということでおおよそ元に戻す、復興は興して復するなので、再現可能なもの復するのには復旧であつて、なにか新しいものをそこで起こすのが復興だと考えた。ハード面で復興住宅をつくるようになった場合に、住環境を担保した事実は復旧ベースで、そこに住まう人々が暮らしやすい町づくりをするとか、破壊されたコミュニティを新しくその地で形成するために、どのようにデザインしていくかという所の方が復興に近いのかなと思った。どこまでを復興のラインとするかはまだ見つかっていないくて、半永久的に続けていくようになるのかなと思う。

武藤) 心が回復されることが一番の復興なのかと思う。建物とかがあつたとしても、人が戻らなければ意味がないというのは思う。私も苦しい思いをして、大学生になりやっとうまく考えられたり、整理できたところもあるが、たまにトラウマになったりもあつて、そこをどう解消していくのかは難しいが、その解消を目指して行くのが復興なのかと思う。

<ブレイクアウトルームの内容共有>

グループは高橋さんを中心に 4 名で話し合った。復興に対する思いは一人ひとり違い、ばらばらの考えを説明してもらった。ある人は、災害で感じた悲しみが力になるときが復興だと言う方もいたし、被災地の方々がその被災地に住み続けたいと思う時が復興だと、人それぞれの復興があると感じた。

江刺さんと 3 人で話した。東京のテレビ局でディレクターをやっていて、石巻出身で当時高校生で被災したので、同じくらいの若い世代がどういうことを考えているか知りたく参加した。1 部ではメディアへの思いを伺って、考えさせられた。震災があって、分断が生まれたよねというのがあって、分断が露わになって、埋められない感情があったと話した。それはずっと続くものではないから、相手の気持ちに寄り添って、お互いどんなことができるか話した。復興は、やはり心の復興じゃないかと話した。忘れ去ることはできないし、忘れ去ることではないけど、311 を期になにか抱えたもやっとした問題や心の傷になったものが、少しずつ刺激を受けながら癒蓋になって、それを遠くから見守ることができるようになるというのが、心の復興なのかなという話がしっくりきた。これからの時期になるとなにか取材ができないかと言われ、自分でもそれがやりたくて記者になったが、東京勤務で難しいなと思うところだったり、勝手にこちらで意味づけたり、ストーリーをつくったりということが往々にしてあるなど感じて、改めてなにができるのかなというのを、今日伺ったみなさんとお酒を飲みながら話したいくらい、もっと伺いたいし、考えたいと思った。

### ■第 3 部

<テーマ>災害時の子どもに対する関わり

阿部) 小学生未満の子どもにも心があり、どんなに小さくてもその子なりに状況を受け入れているのでメンタルヘルスをしっかりして欲しいと思う。ブレイクアウトルームで当時の自分の年のお子さんを持つ方がおり、自分の子どもが同じような思いをするには嫌だと言っていたので今日伝えることができたのかなと思う。

香月) 話を聞いてほしいタイミングや聞いてほしい相手は人それぞれ違うんだなと認識できた。完全の部外者でもなく距離感の丁度いい、ボランティアの皆さんに役割があるのではないかと思ったし、そういった機会があった際に自分もしてみたいと思った。

江刺) 幼いから、何歳だから、被災状況がどうだからとかなど情報で左右されず、まず目の前にいる人と対話することが皆さんの話を聞き大事だと思った。

佐藤) みなさんの体験や意見も同じ震災でも違うんだと感じた。もし災害が起こった時に、子どもや被災者に関われればいいなと思うし、その際の子どもたちが自分と同じでもないと思うので考え直すきっかけにもなった。

高橋) 子どもにも心はあり、どんなに小さい子でも受け入れようとしていることを知っていてほしい。一人一人気持ちも違うので被災者大変な状況にいる人ではなく、まずは目

の前の人に寄り添って関わっていくことが大事だと思う。

志賀) 年代や環境に寄って千差万別、人によって復興の捉え方も違ければ、必要な話し相手がいるんだなと感じた。震災の時、今のような環境が必要だったなと思う。学生だと学校や家庭内が世界のすべてになってしまうのでいろんな意見や考えを持った人がいることを知り、アウトプットすることにより自分の中に整理をつける場が必要だなと思う。今日のように自分たちが震災時に必要だったことを言えるようになったことが、まずすごいのではないかなと思う。また震災を経験した人と集まれる機会を次に繋げたいと思う。

武藤) 2年くらい前阪神淡路大震災の時に活動されていた精神科の先生の読んだ本を思い出した。当事者の感情が汲み取れていなくて、支援する側の一方通行が阪神から変わっていないと思った。子どもの心が重んじられていないのもその一つではないかなと思う。自分から知る、考えるをもっとしていかないといけないなと思った。

清水) 子ども周辺の環境整備、子どもの意見を受け止めることが大事かなと思った。一人一人状況は違うし、一人の子どもに向き合って欲しいしサポートするだけではなく子どもも社会の一員として動いてもらう機会も大事なのかなと思う。

田中) 災害が起きたら、大人も子どもも関係ないなって思った。子ども大人を助けることもできるし、大人が子供を助けることもできるし、子どもだからこう、大人だからこうというのを決めつけなくて同僚の立場で接することが大事だなと改めて思った。正解というものもなく、正解を決めるべきでもない。人によって違うのでその人にあわせて接することが大事。

中村) 地震を経験した子供も大人の声を待っていた。語り部として、小中に語りに行く機会があるが、今の子どもが子どもっぽくない部分を感じている。子どもだからという偏見ではなく、子どもたちも貴重な場所を探していることを大人たちが向き合っていないといけないと思う。語り部活動にも繋げていきたいと思う。

#### ■閉会挨拶：栗田

当時のはちきれんばかりの想いを小さな胸に一人一人が受け止めて、そして今日語っていただき、言葉の一言一言に大人の一人として責任を感じる部分があった。こういった場づくりを今までさせていただき、重要性を再確認した。

人との繋がりの中で先生や親、友人という言葉が出てきて、さらにボランティアの方との繋がりという言葉聞いたとききちんと向き合って、生の声をちゃんと聞くことが大事だと学ばせていただいた。昨年ボイスフロム311という取組をした際に、10年を期に言葉を全国から集めた。昨年度の愛知県へ広域避難している方のアンケートで6名/52名中が愛知に来てなにも良かったことがなかったと回答。皆さんの役割はそういった方の分まで今日のような話を届けて欲しいと思う。社会全体も耳を傾けないといけない。次回の災害にも皆さんの経験が子どもたちに伝わっている社会にしていきたいと思う。

以上